

【物語としての人生①】

A男さんは、自販機で缶コーヒーと言えば、ボスレインボーマウンテンブレンド(サントリー)を毎回必ず購入します。支援職員が手間を惜しんで、「同じ缶コーヒーだし、まあ良いや」なんて思って、ジョージア(コカ・コーラ)で済ませようとしたなら、拳で頭をガンガン叩く自傷と大声を出しながら走り回るパニックが始まってしまいます。

さて、この状況の理解を「自閉症の人のこだわり」とだけで済ませて良いのでしょうか？これが今回のテーマです。

行動理解にまず必要なものは、「なぜ？」の視点です。ここで言えば、「なぜ、ボスレインボーマウンテンブレンドだけを飲みたのか？」ということになります。確かに、缶のデザイン、コーヒーの味、メーカー名などの視点から探求を進めることもできると思いますが、ここではあえて、物語、成育歴、過去の経験という視点から探求を進めてみたいと思います。それは、障がいがあっても無くても、人は、目の前の現在だけを生きているのではなく、脈々と連なる過去の歴史の上に、現在があるから考えるからです。

それではもう少し彼の暮らしを観察して、情報を収集してみましょ。彼の居室には、お父さんに買ってもらった缶コーヒーの空缶が、捨てることができないで所狭しと並んでいます。不思議なことに全て飲み口の穴の部分が見えないように逆さまに伏せられています。ところが自分で買って来た缶コーヒーの空缶は、そのまま飲み口の穴を上に向けて並んでいます。伏せられた空缶をひっくり返そうとすると、彼が「コラ！コラ！」と叫びます。「触ってはいけない！」の意味に聞こえないことはないですが、お父さんの買ってもらった缶コーヒーだということと結びつけると「お父さんに怒られる！」「お父さんが怒る！」という意味にもとれそうです。彼にとって、お父さんが買ってくれた缶コーヒーは、お父さんそのもののようです。ここまで、やりとりが進むと、缶コーヒーの空缶を捨てられない理由がわかってきます。空缶はお

父さんの分身ですもの、恐くて捨てられないのも当然です。

ある時、飲み口の穴を下に伏せることの意味は、彼がヒントをくれました。初めて出かけた温泉の浴場の丸い照明を見ながら、「コラ！コラ！」叫んだのです。彼と一緒に照明を眺めながら、支援職員の頭にひらめいたのは、どうもお父さんの怒っている「目」に丸い照明の形が似ているのでは？という突拍子もないアイディアでした。でもそう考えると、彼の行動の辻褄が合ってきます。

缶コーヒーの飲み口の穴は、お父さんの怒っている目？、だからお父さんの買ってもらった缶コーヒーの空缶は、その怒っている目が見えないように伏せてある？自分の買って来た缶コーヒーの空缶の飲み口の穴は、怒っている目に見えるはずがないから伏せる必要がない？

お父さんがいつでも買ってくれる缶コーヒーは、ボスレインボーマウンテンブレンド、彼がそれしか飲めないのは、それ以外のものを買ったり、飲んだりすれば「お父さんに怒られるから」「お父さんがおっかない」、もっと言えば、「お父さんに嫌われる」からではなかったのか？

そんな視点で彼の暮らしを見渡すと、お父さんとの「怒る－怒られる」関係を感じさせるいくつもの行動を確認することができます。彼は、支援職員の前ではニンジンを残す、でもお父さんの前では決して残さない。彼の履くズボンは、お父さん購入のスラックスだ。彼はこれ以外のズボンを履くことがない。

彼のボスレインボーマウンテンブレンドしか飲まないのは、「自閉症の方のこだわり」ではないことが、ここまでくれば分かります。お父さんに怒られないために、一生懸命努力している姿なのです。彼は、何年もかかりながら、お父さんの前でニンジンを残せるようになりました。お父さんはその姿を怒らずに応援してくれるようになりました。おっかないお父さんは、彼の前から次第に消えていきました。気がついてたら、彼は、コーラを飲んだり、オレンジジュースを飲んだりする自由を手に入れていました。